禅の友

Zen no Tomo

4

April 2025

ご本山だより

大本山永平寺【ガラス磨き作務】

修行僧たちが回廊の窓ガラスを外し、一枚一枚磨いていく光景がこの時期の風物詩です。

四月は高祖大師報恩授戒会が修行されます。僧俗問わず全国から多くの方が永平寺にいらっしゃる一大行事です。その準備の一環として行われます。同様に高祖大師御征忌が厳修される九月と年末にも行われる作務です。

「永平寺の廊下はいつきてもきれいだ」と参拝にいらっしゃった方からよく言われます。筆者も同様に感じます。普段生活していても廊下が汚れていることはめったにありません。風が強い日に枯葉や埃が落ちていたとしてもしばらくするとなくなっています。雨や雪が降っている日は床が濡れていてもすぐに拭き上げられ、滑りやすいところにはマットがひかれます。

これらは直歳寮という境内の修繕管理を担当する寮舎の修行僧たちが対応しているのです。常に境内を見回りこの環境を維持するように努めています。

しかし、それだけで保っているわけではないのです。廊下を歩いている時にゴミを見つければ寮舎に関係なく一人一人が率先して拾います。汚れていれば急いで掃除道具を持ってきて自主的にきれいにするのです。

作務は「きれい」、「きたない」という価値から離れ、ただ行うことが目的なのだとよく説明されます。

確かにそうでしょう。しかし同時に、毎朝の廊下掃除やガラス磨き作務の様な全員で隅々まできれいにする作務をとおして、境内を保っていこうという意識が芽生え、行動が身についてくるのだと思います。

大本山永平寺
福井県吉田郡
☎〇七七六・六三・三一〇二

ご本山だより

大本山總持寺【春の嶽山（がくさん）】

大本山總持寺
神奈川県横浜市
☎〇四五・五八一・六〇二一

春爛漫の好時節。新年度がスタートし、身も心も清々しい気分で新世界に飛び込んで行く人も少なくはないでしょう。

總持寺では四月より夏安居制中（げあんごせいちゅう）という一〇〇日間の修行期間に入ります。その期間中、大勢の修行僧の先頭に立って指導するリーダーを「首座（しゅそ）」と呼びます。

安居（あんご）の始まりはお釈迦さま在世より始まったものです。インドでは雨期に入ると修行者は遊行（ゆぎょう）をやめて精舎にこもって修行に専念しました。そしてこの期間は草木虫類を傷つけるので、お釈迦さまは雨期の止住を規定したのです。これが安居の始まりです。

また四月八日は仏教の開祖・お釈迦さまのご誕生になられた日で「花まつり」ともいわれます。お釈迦さまはルンビニの花園で誕生されたといわれており、その故事にならって寺院では沢山の花で飾った花御堂（はなみどう）を作ってお祝いすることから「花まつり」と呼ばれるようになったのです。

そして十日から十六日は報恩大授戒会（ほうおんだいじゅかえ）です。

全国から参集した戒弟（かいてい）と呼ばれる参加者と多くの山内外の僧侶が一体となって自らの罪を懺悔（さんげ）し、戒の何たるかを聴聞し、そして戒師さまより戒を授けていただくのです。

戒を授かることは仏道に真実に生きようとする確かな証です。

「戒は是れ正順解脱（しょうじゅんげだつ）の本（ほん）（もと）なり」とあるように一つ一つの正しい行いによって一つ一つの心が開き、仏心に目覚め一人の仏弟子が誕生するのです。

曹洞 俳壇

選・坊城俊樹

冬の夕けんか相手が逝きし夫（つま）

静岡県　末光愛正

評　このけんか相手とは幼馴染みの人なのだろう。そんな懐かしい友人が亡くなってしまった。昔けんかをしたことを思い出している姿がいたたまれない。そんな淋しそうなご主人の顔を見るとこの冬の夕方はことに寒さと寂寥感がつのるのである。

除夜の鐘歳の数まで聞き眠る

宮城県　阿部徳夫

評　大晦日の除夜の鐘は一般には新年になると打ち始める。紅白歌合戦も終わりその鐘の音を聴きつつ新しい年を迎えた。今年は自分の歳の数まで聞いてみようと思った作者。しっかりとそれを聞き終わると安心されて眠りに入るのである。

◆イヤリング日和となりぬ久女の忌　埼玉県　野原孝子

◆敬意やがて恋慕となるや久女の忌　長野県　森山昌子

◆山眠る白き褓にくるまれて　岡山県　有元克英

◆お浄土の吾子の来そうな冬日和　秋田県　髙橋カツ子

◆病床の半身起こされ初鏡　東京都　鈴木英治

◆どんど焼き囲む人の背みな寒し　福島県　大槻弘

◆渡り鳥目印は俊太郎歌碑　千葉県　甲斐勇

◆元旦の富士どっしりと日本晴　宮崎県　石濵徹

◆我が町は霞に沈みチャイムのみ　山口県　稲村みどり

◆一合の米研ぐ指や寒の水　大阪府　口本美智子

選者吟

摩天楼とは数百の冬の窓

俊樹

作句小見　摩天楼とは現代の高層ビルのことを言う。それは数十階は優にある。だからその窓は数百にも及ぶこととなる。それら数百の窓は全て冬の窓なのである。あたりまえなのだが、そう言ってみると冷たい窓たちの存在感が強烈に伝わって来た。

【送付先】〒105-8544　東京都港区芝2-5-2　曹洞宗宗務庁　禅の友係

曹洞 歌壇

選・長澤 ちづ

寒行の団扇太鼓の高き音は津波の襲いし坂を踏みゆく

岩手県　阿部 懇子

評　寒中、薄着に裸足で行われる厳しい修行の寒行だが、一般の人も参加出来るらしい。団扇太鼓を叩き、自らを鼓舞して行うのだろう。東日本大震災の大津波で多くの命が奪われた坂、鎮魂の思いの強さも「高き音」には込められる。

原発事故なき頃の旅想ひけり修復ならぬ真野の草原

福島県　大槻 弘

評　二〇一一年の東電の福島原子力発電所の事故以来、あの真野の草原の美しさを、素朴に眺めることが出来なくなったと嘆く作者である。

◆楽しかった想い出だけを取り出だす小箱の蓋の角すり切れて
兵庫県　前田 あつ子

◆引く波に転がる砂利の音続く冬の浜辺に一人歩けば
静岡県　小川 健治

◆いつしらに隠しき母の顔となり娘は辛酸を息子には語らず
静岡県　杉原 民子

◆菩提寺の壁に貼られし年忌表初代の百年父の三年
岐阜県　丸山 正己

◆仏壇に供えた餅を持ち帰る誰もいない実家をあとに
京都府　三浦 大示

◆熟れ柿の日毎落ちゆく下蔭を梢見上げて人の過ぎゆく
鳥取県　徳本 義則

◆確実に振り込まれくる年金よ物価高騰は工夫すればよし
北海道　加藤 智子

◆しんしんとただ深深と降る雪に耳目澄まして父母の声聴く
秋田県　小松 紀子

◆窓外にふくら雀の二羽が来て互いの無事を確かめている
静岡県　髙尾 善五

◆寝床にて灯りひとつで過ごすなりなやめる日々の晴れる待ちつつ
新潟県　長谷川 亜久里

選者詠

ショルダーの革紐に噛み跡残りおり生の痕跡、人かなします

ちづ

作歌小見　前田さんの下句の「小箱の蓋の角」の「すり切れ」具合に着目、架空の小箱である点にも感心しました。また小松さんも、雪の降り積もる様子と、夜が更け行く時の重なりとを重ね、裡なる父母の声を巧みに詠み込んでいます。

ハガキ１通に３句（３首）以内を俳壇、歌壇別々に住所（都道府県名から）・氏名を楷書ではっきりと記入し送付先までお送りください。